

ヒライアツコ

『個人主義と社会主義』

Atsuko Hirai, *Individualism and Socialism: The Life and Thought of Kawai Eijiyō (1891-1944)*, Harvard University Press, 1986, viii + 273pp.

§ 1. ハーバード大学に提出された学位論文を基礎とす

る本書は、「はしがき」と「むすび」には含まれた8章計200ページで、53年間の河合栄治郎の生涯と思想をあとづけている。英文で書かれた最初の河合に関する研究書である。その内容を一瞥するには、はじめに章節の見出しをまとめてかかげておくのが便宜であろう。

1. 個人主義者の生誕(両親、「家」と次男、「江戸っ子」、初期の学業、日本人とスーパーマン)
2. 個人主義者の形成(一高とティーム・プレイ、新渡戸校長と友情礼讃、性格形成と個人主義、一高時代の河合、キリスト教との出会い、歴史と個人)
3. さまざまな環境での個人生成(少壮官僚河合、個人主義とアメリカの社会正義、日本の官僚制と集団主義、教授河合、イギリス人と個人主義、徒弟時代の終焉)
4. T. H. グリーンと「理想主義的個人主義」(河合の出発点、グリーンとの生活と信条: 河合にとっての鏡、グリーンとの形而上学と道徳: 河合の哲学の基礎、個人・国家およびその他についてのグリーンとの概念: 河合の政治理論の基礎、グリーンとドイツの哲学者達とに関する河合の解釈、河合のグリーン解釈の明治の先学たちとの対比)
5. 理想主義的社会主義: 第3段階の自由主義(私有財産と社会改革に関するグリーンとの所論、グリーンとの「上部構造」に関する河合の所論、中間国家と日本の自由主義、資本主義と社会主義、議会主義対革命、社会主義者とその課題、多元論、河合の参照した著作)
6. 河合とマルクス主義者たち(統一戦線論者、「思想善導教授」、思想善導再考、「大学の顛落」論義、意志の自由、森戸・河合論争回顧、カール・コルシュとヨーロッパのマルクス主義、大森義太郎の苦情、河合にとってのマルクス主義)
7. 河合とナショナリストたち(軍部の行進、大学の自由再論、河合の平和への希求、議会主義の擁護、河合のファシズム論、ナショナリストの河合論)
8. 裁判と河合栄治郎(告発人と告発、河合の防衛、判決と上訴、日蝕)

§ 2. 8章はつぎの3つにわけられよう。(1)1—3は、個人主義者河合栄治郎が、1891(明治24)年東京の商人の次男として生れてから、家庭での幼年時代・一高東大時代・農商務省の官僚時代・アメリカ留学後の辞職・東大教授・イギリス留学を経て1925(大正14)年に一個の自立した思想家として帰朝するまでの過程をたどる。(2)4と5は、理想主義的個人主義という河合の思想体系が

T. H. グリーン(1836—1882)との取り組みの中で形成されてゆく過程を分析しつつ(その中で、著者は河合とグリーンとのちがいを指摘することを忘れていない、111頁参照)、河合の名づけた「第3段階の自由主義」の思想的特質を究明する。そして彼の後半生をとりあげる(3)6—8は、大正末から昭和初期に日本の論壇を席卷したマルクス主義に対し、そのメリットを評価しつつも、思想体系としてそれが内包する矛盾を指摘して根本的批判の論陣をはる時期と、当局に弾圧されたマルクス主義に代って抬頭してきた国家主義者に対して、言論出版の自由とりわけ大学の自治と議会主義を擁護するために奮闘する時期、そして最後に国家主義者の告発をうけて裁判で争い、最終的に敗訴して戦争末期の1944(昭和19)年に病没するまでの足跡を跡づける。

(1)のところを著者は、河合の哲学の核心にある生活態度としての個人主義が団体主義的な日本の家庭や社会の中でどのように発展したかを説き明かすべく、とくに力を入れたとはしがきでのべている(xv頁)が、この部分では一高時代の叙述がとりわけ興味深い。新渡戸稲造校長の思想的感化、弁論部での交友関係、弁論部が招いた徳富蘆花の大逆事件についての演説や阿部次郎『三太郎の日記』の影響、内村鑑三の指導によるキリスト教への接近と反発などによって、本能的に個人主義者だった河合はこの時期に意識的選択によって個人主義者になった。この意味で一高時代は河合の個人史におけるルネッサンスとリフォーメーションだった、と著者はいうが、同時に適切にも、こうした自己革命にもかかわらず、えらい人になろうという河合少年の夢は消えることなく、新しい次元で一そうふくらんだと指摘している(30—31頁)。東大法学部で河合は新渡戸の親友小野塚喜平次と後に岳父となる金井延との影響を強くうけるが、セリグマンの『歴史の経済的解釈』を通じてマルクスとマルクス主義に遇ったことが重要である。河合青年はマルクスに魅せられ、マルクス主義から多くを吸収することで、社会的経済的問題の所在に開眼するが、同時に最初の出会いからずでマルクス主義の思想的性格にあきたらなさを感じていた(39頁)。著者が「官に就くに際して」という1915(大正4)年の演説によりつつこの点を指摘していることは注目される。ともあれ『職工事情』で日本の労働者の悲惨な状態を知ったことや金井延らの工場法制定運動の影響が河合を農商務省入りにかり立て、彼は官僚として日本の社会改良のための計画の立案と実施に当ることに若い夢を託する。アメリカ出張は一そうこの夢をふくらませるが、労働条件の改善は労働者の権利であって慈恵

的に与えられるべきでないとする彼の主張は省内でも過激すぎるとして受け入れられず、彼は辞職して日本人の精神改造のための思想研究に志すことになるが、「官を辞するに際して」(1919年、大正8年)で河合が日本が必要とするのは「ベンサムとミルの思想、ルーテルの信仰と神の福音」と書いて、そこにマルクスの名が出てこないことに著者が読者の留意を求めていること(55頁)は、上掲の指摘と照応して示唆に富む手法である。

§3. 河合は新設された東大経済学部のスタッフになり、近代イギリスの政治経済思想史の研究と講義に没頭するが、その中でA.V. ダイシーの『19世紀のイギリスにおける法と世論との関係』を読み、J.S. ミルによって功利主義的個人主義が社会主義的経済改革を受け入れる準備がなされ、グリーンは功利主義哲学批判によって社会主義の成長が促進されていることを教えられて感銘する。1922(大正11)年彼はイギリスに留学し、グリーンがいたオックスフォードで個人主義の哲学的基礎の研究に従事する。8年後に公刊された大著『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』(1930年、昭和5年)はその成果であって、河合はこれによって、日本の国家主義とマルクス主義とへの両面批判を行なう武器を獲得した。本書の中心部分をなす2つの章は、この「理想主義的個人主義」、「理想主義的デモクラシー」、「第3段階の自由主義」が昭和初期の日本においてもつ意味をさぐることを課題としている。

河合がグリーンを評価するのは、グリーンが認識論、本体論、道徳哲学、社会哲学等からなる「土台」と政治学、社会改造論等の「上部構造」とをあわせ持つ「全体的統一的思想体系を提示した」という点である(72頁)。こうした思想体系にはじめて統一的思想体系たるマルクス主義と十分対抗することができる。そこで河合は、中島力造からはじまる日本のグリーン研究が専らその「土台」を取り上げていたのに対し、はじめてグリーンを全体系的に研究した。まず「意識」という精神的主体的契機を重視する彼の認識論からはじまって、真の善とは人間が永遠の精神的原理との関係のゆえに内在的に有している種々の能力の実現であるとするその道徳哲学や、国家は個人の権利を保護する為に存在するとする——従って条件づきであれ抵抗権も認める——その社会・政治哲学が研究され、ついで「土台」から「上部構造」に進んでグリーンは私有財産論や社会改革論が吟味され、河合のグリーン評価は一層高まる。「要するに河合は、グリーンと〔イギリス〕労働党に、理想主義の『土台』にうちたてられた社会主義の『上部構造』という最高に重要

な可能性を見出した。社会主義と理想主義を綜合したこの構造は、社会変革の哲学としてのマルクスの唯物史観を不用にすることを河合に可能ならしめたのである」(100頁)。

§4. イギリスから帰ってからの河合の生活は、右に対してはマルクス主義を防衛し、左に対しては唯物論を克服するという、自由主義者のみがはたしうる「高貴な課題」のために、左右からの「両面攻撃」に挑戦することにささげられた(149頁)。本書の最後の3章は迫力ある筆致でその壮絶な戦いの跡をたどるのにささげられているが、ここではただ、第6章では、河合と蠟山政道との共著『学生思想問題』(1930年)をとりあげつつ、左翼が河合にはった権力の「走狗」というラベルはミスリードと断じている一節(127-130頁)、第7章では、2・26事件の直後(3月9日)に河合が敢然と東大新聞に寄稿した「2・26事件の批判」が、「暴力は世界をひとときは制しもしよう。だがそれはそれ自身の破壊的性質によってくずれ去るものだ」という一節をもふくめて紹介されていること(162-163頁)、そして第8章では、河合への著者の挽歌(「法と秩序のために社会改良の延期を容認する点で、河合はソクラテスよりもむしろ脱獄するために人工的な翼で飛んだイカロスに似る。グリーン・ミル・理想主義的個人主義・第3段階の自由主義・自由社会主義でできた河合の翼は戦時の日本の空には合わなかった。太陽神の嗣子の近くまできた時のイカロスのように、翼はとけて河合はファシストの海中に落下した」、194頁)を紹介するにとどめざるをえない。

平明な筆致とバランスのとれた構成、人間河合の内奥にせまるべく未公開の資料や関係者との面接が活用されていること、河合の思想と行動を近代日本の歩みの中でとらえようとする努力、河合のキリスト教との関係が執拗に追求されていること、それらが本書のすぐれた特色となっている。とくに、本書が、戦闘的自由主義者としての河合の本領を高く評価する一方、中日戦争後の彼の「転向」や裁判の過程での思想的後退を論評していること(187, 195頁など)は、「彼を遇するにきびしすぎもせず甘やかもしないように」との著者の切望(はしがき)がほぼ達成されているという読後感を大方にたえるだろう。だが河合の全体像を本書に求める読者なら、グリーン研究以外の河合の重要な学問的業績たる『社会政策原理』やドイツ社会民主党論が顧られていないことが不満として残るかもしれない。私としては、晩年の河合が、門下生のみならず多くの友人(羽仁五郎のようなマルキストをも含めて)の協力で編集刊行した学生叢書に言及

してほしかった。この叢書は、河合自身にとっても、当時の学生に与えた影響から見ても、大きな意義をもっていたと思われるからである。

〔杉原四郎〕

